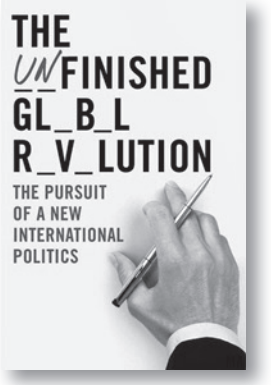
読書案内

マーク・マロック・ブラウン著
未完のグローバル革命―新しい国際政治をもとめて

Mark Malloch-Brown
The Unfinished Global Revolution: The Pursuit of a New International Politics
The Penguin Press, 2011

荒木　知



本書は、国連開発計画（UNDP）総裁や国連副事務総長等の国連関係機関の要職を歴任し、さらにはイギリス・ブラウン内閣においてアジア・アフリカおよび国連担当相を務めたマロック・ブラウン卿の回顧録及び将来の国際システムのあるべき姿への提言である。

マロック・ブラウン卿若かりしときから、イギリス政府閣僚として取り組んだ二〇〇九年四月のロンドンG20サミットまで、激動の国際政治をそのときどきの立場から何を感じ、学んだかが率直に描写されており、開発のフィールドの第一線にいる者からグローバリゼーションに取り組む国際政治経済システムに関心のある者まで幅広い読者層にお勧めできる。

イギリス人である一九五〇年代生まれのマロック・ブラウン氏は無給インターンとして一九七七年に国連本部勤務を開始するが、すぐに官僚主義的で機能不全に陥っていると目に映ったニューヨーク本部に失望し、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）スタッフとしてカンボジア・タイ国境におけるカンボジア難民の支援に取り組む。国連機関の要職を歴任したと聞けば、大組織において順調に昇進したようなキャリアを想像するが、マロック・ブラウン卿のグローバリゼーションや国際政治経済システムへの造詣は開発途上国における第一線の経験に裏打ちされている。

カンボジア・タイ国境で奮闘する若きマロック・ブラウン氏はある日、木陰に嬰児が放置されているのを発見する。すぐにクリニックに運ぼうとするが嬰児は氏のひざの上で息を引き取ってしまう。その後氏は四人の子供に恵まれたが、生まれたばかりのわが子を抱き上げるたび、難民キャンプにおける経験を思い出したという。

世界銀行副総裁などを経て一九九九年にUNDPのトップとなる。そこではUNDPの限られた資源をガヴァナンス・紛争後の国家建設・貧困削減・持続可能な開発という中核分野へ集中するよう主導する。

二〇〇五年から二〇〇六年にかけては、国連副事務総長などとして、コフィー・アナン事務総長と共に、九・一一事件や引き続くイラク戦争など複雑化する国際情勢に的確に対応できるよう国連改革に取り組むが、ネオ・コンサヴァティヴ派の旗手とも目されるジョン・ボルトン氏を国連大使に送り込んだアメリカ・ブッシュ政権との摩擦もあり、改革は頓挫する。この間の経緯を振り返り、国連改革の推進にアメリカとパートナーシップは欠かせない旨述懐している。

直近におけるキャリアとしてイギリス・ブラウン政権に招かれ、同時に爵位を授けられている。ブラウン政権では金融危機後のロンドンG20サミットに奔走する一方で、金融・食料・エネルギー等、国際的な問題解決に取り組むブラウン首相に投げかけられた、「私達の生活とどのように関係するのか」との国民の冷たい声に接し、現代の政治家のジレンマを感じている。

本書の最後において、マロック・ブラウン卿はダイナミックに変動する世界に対応するには、公正かつ正統な権威を認められた強い国際機関が必要であり、国連がそうであるためにはまだ多くの改革が必要であるとする。もし国連の改革が十分でないときは、G20やよりインフォーマルな枠組みがその役割を果たさざるを得ないとしているが、長年国連に勤務してきたマロック・ブラウン卿の意図はあくまで国連の強化が望ましいとしているのではないかと思われる。

人々と国家そして国際機関との間の新たな関係が生まれるとき、それがまさに革命（revolution）であるとして締めくくっており、これが本書のタイトルである"The Unfinished Global Revolution"のテーマにつながっている。難解な学術書ではなく、英国人らしいスタイリッシュな文体で書かれた一冊である。

あらき　さとる

新潟県出身。1995年国税庁入庁。
OECD（経済協力開発機構）事務局職員等を経て2009年より証券取引等監視委員会事務局に勤務。